



(株) 神戸風月堂 取締役社長、下村俊子さん

■祝・神戸風月堂百周年／特別インタビュー

お客様、社会との つながりを大切に

元町の地でお菓子を通して神戸の人々を見つめ続けてきた神戸風月堂。アルバムに残る色褪せたモノクロ写真にその百年の歴史を感じます。創業者の意志を受け継ぐ現社長・下村俊子さんに風月堂のこれからの百年をうかがいました。

―百周年を迎えられた今のお気持ちを。

私が社長に就任いたしましたのが一九九〇年の秋、就任七年度で神戸風月堂百周年という記念すべき年を迎えられたことは、感慨に堪えません。

二十一世紀を見据えたこの時期にちょうど百年ということで、ゼロからの出発と申しましょうか、新たな

気持ちで取り組んでいこうと考えております。そして、この先も人々に愛され続けるお店でありたいと思っております。

―神戸風月堂の歴史を簡単にお教えいただけますか。

神戸風月堂は、明治三十年十二月十二日に吉川市三が元町三丁目創業したことに始まります。新しい建物ができるまでの約三年間、市三は父親の意向もあって東京で勉強していたようです。大正六年には神戸市内で最初の喫茶店をはじめました。「ゴーフル」が誕生いたしましたのが昭和二年、以後わが社の代表商品となりました。



神戸銘菓、ゴーフル。変わらない美味しさをいつまでも

昭和十九年、二十年と続いた神戸空襲では、風月堂本店が被災、大打撃を受けましたが、翌二十一年の創業日には再興開店いたし、今日に至っております。
―初代吉川市三さんはハイカラな方だったんでしょね。

先祖代々、おつちよこちよいだったことは間違いないですけどね(笑)。江戸時代に旅館、足袋屋、幕末には洋服屋さんといういろいろやっていたようです。

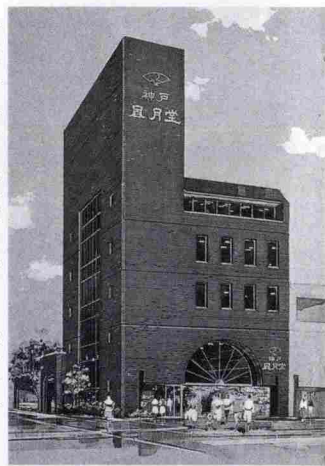
今年で神戸は開港百三十年ですよ、風月堂が百年ですから、創業当時は開港して三十年が経っていたこととなります。外国の方も大勢みえていましたので、その方たちにも通用するもの、そして、これからの日本の方にも馴染んで頂ける洋菓子のお店を開こうと考えたようです。

―神戸風月堂の今後の展開をお聞かせください。

今回は、会社の百年史のようなものではなく、五十



昭和初期の神戸・元町通。左側電柱の向こう側に2階建の偉容を見せるのが、ありし日の神戸風月堂



元町のシンボリック存在

年後、百年後の研究者の方々の参考資料となるようなものを作りたいと考えています。お菓子の歴史と申しましょか、お菓子が社会とどのように関わってきたか、少し学術的な見地から編纂できれば、と思います。私のライフワークです。

また、お子さん対象のお菓子教室を始めました。ただ作り方を覚えていただくのではなく、「くず」を使う時はその産地を説明して、ちよつと社会科風に学んでいただこうと。地球が様々な問題を抱える中で、次世代を担う方々にその問題を考える機会を提供させていただければと考えました。

―百年経って主流のお菓子は…。

やはり『ゴフル』ですね。和菓子としては『源氏の由可里』でしょうか。

これからは、健康のすぐれない方々にも召し上がっていただけるお菓子を作りたい。例えば、病院などのお食事の一部として出していたけるようなもの。「健康食品」というわけではなく、身体に無理のない自然なお菓子といましょか、気軽につまんでいただけるものがいましょね。

ちよつと気分が悪い、でも何か食べておかなければいけない時でありますでしょ。栄養価うんぬんをいわれると食べる気もなくなってしまう。そうではなくて、見た目も普通のお菓子と同じ、さりげないものにしたいんです。本当は栄養価もきちつと考えられていましょんですけどね…。(笑)。

■神戸異人館を考えるシンポジウム

異人館は人々の記憶を保存している

九月六日北野クラブで、神戸の街に異人館がはたす役割、今後のあり方について「神戸異人館を考える」シンポジウムが行われた。神戸の象徴とされる異人館。その存在価値が見えてきた。



井上和雄氏
〈神戸商船大学教授〉



弓倉恒男氏
〈神戸海洋博物館館長代理〉



大野芳氏
〈ノンフィクション作家〉



坂本勝比古氏
〈神戸芸術工科大学教授〉



浅木隆子氏
〈北野・山本地区をまもり、そだてる会会長〉

★建物は暮らした人の生活を感じさせなければ

先日、大野芳さんが上梓された「遺書になった手紙」は、一九一九年に神戸の異人館で生まれ育った、フェナン・ティエック氏の心の軌跡を描いたノンフィクションです。この作品の刊行を記念し、また歴史の変遷から異人館の存在意義などを探ろうと、今回のシンポジウムは企画されました。

まずはじめに、大野さんから「生活感のある歴史」というテーマで、お話いただきます。

大野 この本を書くきっかけは、先のような経歴のフェナン・ティエックという方が、フランスでご健在だと知ったことでした。しかしご高齢なので、いっとう切り口で作品にするかということも固まらないまま、とにかくフランスのバスクまで会いに行きました。それが四年前です。当時手がけていた別の作品があったため、手つかずのまま翌年1月には阪神大震災。その十日ほど後に、フェナンさんは亡くなってしまいました。

フェナンさんが住んでいた異人館は北野天満宮の上の方にあったので、その後、取材のために北野・山本地区で異人館を見せたいだりしました。すると、震災後という特殊な状況のせいもあったでしょうけれど、有名な風見鶏の館にしても、建物の中に少々ベッドが入っているくらいで、何ら物語るものがない。建

物というのは、それを建てた人や暮らした人の生活を
感じさせる場所でないかならないと思います。ところ
が現在の異人館は、建物という抜け殻だけを見せら
れて「これがセミです」と説明されているようなもの
です。もちろん抜け殻は抜け殻であって、セミの本体
ではありません。

私はフェナンさんを通じて、異人館の主がどうい
う人だったかということを多少知ったわけですが、異
人館の文化というのは、そのような人々の記憶と一緒
に保存すべきではないかと感じました。やはり人間の
ぬくもりの感じられないものは、文化として不十分な
気がします。神戸ではまだ、住んでいた方を調べる線
が残っているし、昔をよく知る方もいらつしやいます。
今がちょうど、きちんと文化を保存できるかどうかの
端境期だと、そういった思いから今回のシンポジウム
につながったわけですね。

井上 私は神戸商船大学に勤めていることもあって、
家は大阪なんですけど、神戸の住人のような気持ちがあ
ります。今回のパネリストのみなさんは、それぞれ神
戸にとっての異人館の意義を考えておられる方ばかり
ですが、大野さんからお話のあったような観点か
ら、それをより深めていただければと思います。

★外国人が建てて住んだ家が異人館

弓倉 私は四十年近く北野町に住み、現在はメリ
ケンパークにある神戸海洋博物館に勤めています。
今年は神戸開港百三十年目に当たりますが、
その歴史の中に異人館は象徴的にある。北野・山
本地区の異人館も、港の方から見ると、また違っ
た意味合いがあるのではないかと考えています。
坂本 私と神戸の異人館の出会いには三十数年前に

遡ります。昭和三十年代当時、北野・山本地区にあつ
た数多くの異人館が今は姿を消しており、隔世の感が
あります。けれど、今回のシンポジウムにたくさんの方
がお集まりのように、みなさんの感心の高さには深
い敬意を払いたいと思います。

大野 私の作品では、フェナンさんのように、日本と
外国というふたつの文化を経験した人を題材にするこ
とが多いんですが、その点で神戸は貴重な財産をもつ
ています。親戚の方が海外にいらつしやるとか、貿易
を手がけていたとか、そういう人や資料が多く存在す
る。その価値を再認識して、資料などを次の世代に引
き継いで、研究をリレーしていただけたらと思います
ね。

浅木 私が会長を務めさせていただいている「北野・
山本地区をまもり、そだてる会」は、異人館だけを守
る会のように思われている面もありますが、地域全体
を良くしていこうという会なんです。NHKドラマ
「風見鶏」以降、急増した観光客への対策と、地区景観
の保全・育成を目的にさまざまな活動をしてきました。
北野・山本地区というと観光一色の感がありますが、



平成9年4月に一般公開にふみきった風見鶏の館

実は八〇%が住居地区。私も住民の一員として、異人館にはどういふ方が住んでいたかなどを知り、文化としての異人館の保存に力を入れたいと考えます。

井上 そもそも、神戸に「異人館」という言葉を定着させたご本人である坂本先生に、その経緯をお聞きしたいんですが。

坂本 昭和三十五年あたりに「神戸の異人館」という小冊子を書いたのがはじめてでしょうか。洋風建築の家はすべて異人館というわけではなく、外国人が建てて住んだ家を異人館と位置づけました。

当時は神戸市に勤めて、建築に携わっていたんですが、やはり神戸の歴史を知ったほうがいいだろうと思って北野・山本地区の散策をはじめました。すると非常に多くの西洋館が残っている。驚くと同時に、非常に惹かれました。実は私は、中国のチンタオ生まれで上海育ち。終戦で日本に引き上げてきたんですが、考えてみると、中国では風見鶏の館のような洋館に住んでいたんです。懐かしさと同時に、神戸の異人館が建てられた経緯やそこでの生活に興味が湧きました。また異人館には、日本の近代建築の欧米化の歴史の中で、大きな意味を持っていると思います。それぞれが、欧米でも名のあるような建築家の手によるものです。

井上 建築学的にも、また近代神戸が異人さんの文化を取り込みながら発展してきた、その代表としても、異人館には大きな意味があります。もともと外国人は居留地にいたわけですが、染み込むように神戸の中に拡がっていった、それが神戸の独自の文化を生み出した。そのあたりの経緯を弓倉さんにお話いただきたいんですが。

弓倉 日本の居留地に限らず、鎖国していた国では、中国の租界など、一定の場所に外国人をおくようにしていました。神戸でも当初は居留地に職場と住居が一

緒にあったんですが、業績をあげるにつれ分けたくなる。そこで雑居地と称して、山手の方まで外国人が住むことを認めたんです。当時の地図を見ると、明治2年にはすでに20数軒の外国人宅が雑居地にあります。

井上 居留地に押し込めておこうという政策だったのが、なぜ山手に出るようになったんでしょうか。

弓倉 開港の年に、残念ながら「神戸事件」というのがありました。これは簡単にいうと、岡山藩の行列の前をフランス兵が横切ったことによるトラブルですが、何とこの時神戸は、五日間に渡って六ヶ国に占領されています。港にあった各藩船も拿捕されて。その後も同じような堺事件などがあったので、新政府が気をつかって居留地をきっちり限定したんですね。場所も最初は兵庫の予定だったのが、あそこは古くからの港町として賑わっていてトラブルが起りやすいだろうと、ちよつとはずして神戸村にした。ところが実際には、一般の人は外国人が入ってきても平気だったし、居留地以外に外国人が住んでも何の支障もなかった。臨機応変にどんどん雑居地をひろげていきました。

井上 神戸村から現在の神戸へ発展した背景には、やはり居留地文化のインパクトがあったと思います。異人さんはこんな風貌をしていて、こんなものを食べ、こんな遊びをして……というインパクト。

★街の記憶が、神戸を神戸たらしめている

大野 当時、雇われ外国人といわれた学者や技術者は、国立大学の年間予算が一万円程度のところ、一千元の月給をもらっていたとされます。そういう人たちが、日本の優れた美術品をコレクションし、また芸術家のスポンサーになったんですね。フェナンさんのお父さんモリスさんも、小磯良平をはじめ多くの芸術家と



一般公開される前のうろこの館（昭和50年代前半）

交流があったそうです。フェナンさん自身も、谷崎潤一郎などつきあいがあったそうです。ティエック父子のような外国人が、日本の芸術家を育てた、あるいは影響を与えたという文化的意味は大きいと思います。坂本 異人館という外国人の手による建築物も、もちろん日本人に影響を与えています。私が異人館に関わりはじめた昭和三十年代には、あんな建物を残しておいて何になるのかと言われ、随分苦労しました。確かに同じようなコロニアルスタイルの建築物は、ヨーロッパに行けばもっと素晴らしいものがありますが、比較すること自体がおいしい。神戸という土地に異人館

が生まれ育ってきた、その文化自体を評価するのが大切なんです。また大野さんがおっしゃるように、建物というハードと同時に、そこでの暮らしや建てられた経緯などというソフト面も調べなければと思います。井上 浅木さんは、住民として異人館保存に関わってこられたわけですが、今までのご苦労や今後のことなどお話を聞えますか。

浅木 戦前の北野・山本地区には三百あまりの異人館がありました。昭和四十年代半ばのマンションブームの折に、随分壊されてしまいました。また、坂本先生に調査していただいて、異人館は保存すべきものだという話になっても、経費がかかりすぎるとか。昭和五十七年のNHKドラマ以降、異人館が観光地の目玉としての価値をもつようになりましたが、今度はいわゆる観光公害の問題が起きたりして、保存といっても試行錯誤で難しかったですね。

また、震災により大きな被害も受けましたが、全国からの募金もありましたし、今後は企業からも出資を募って修復・保存を続けていきたいと思っています。北野・山本地区を訪れる方は、テーマパークのように見るのではなく、そこに人の暮らしがあったことに思いを馳せながら、散策していただけたらいいですね。私どもの会でも、平成六年から「まちの記憶を引き継ぐ運動」に取り組んでいます。

井上 街の記憶が、神戸を神戸たらしめている。人が自分を自分と認識できるのは、それぞれの記憶があるからで、街も同じだと思っています。街の記憶のよすがとして、きちんと異人館が建っていて、そこに暮らした人の記憶も引き継がれていくというのが理想のあり方でしょう。

〈九月六日北野クラブにて〉

① 北野界限を歩く

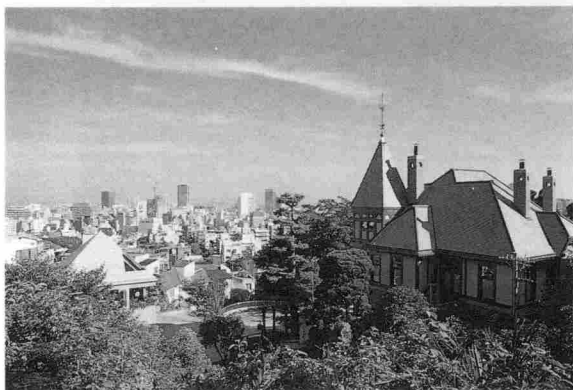
宮本 豊子 兵庫県立生活科学研究所 所長



新しい息吹が 二本のストリートから

青空にそびえる風見鶏。何といっても神戸のシンボルである。北野町の山手、堂徳山の緑を背に建つ風見鶏の館。好天の日の早朝、空の青さと流れ漂う綿のように白い雲と山の緑、このアングルのなかを抜けるようにそびえ立つ風見鶏のポール。この美しさに、思わず両手を空に挙げて風見鶏を仰ぎたくなる。私の眼で直に見るこの構図は、絵葉書でも写真でも満足させられない神戸の心の宝物。

今の風見鶏の姿には、大地震のあの悪魔のような影はもうない。しかし、この館も、ほかの多くの異人館も地震で



かなりの被害を受けたことは周知のとおり。今年になって、そのほとんどが修復され、かつての姿をとり戻した。地元民としても嬉しいことだが、これも全国のみなさま方がご支援、ご協力があったからこそである。地元民も基金集めに奔走した。
幸いにも、北



中山手カトリック教会。地震の被害は免れた

野町山本通り界限は比較的地震の被害は少なかったが、異人館以外にも多くの古い日本家屋や神戸らしい数々の店がつぶされた。また、復活をみない店、去っていった店などまだまだ寂しい部分が残っている。でも、三年近く経った今、店も増え、異人館街も活気が戻り、多くの観光客が来てくたさるようになった。季節に関係なく、この街で洒落た結婚式を挙げる若いカップルも多い。

この山手の北野町へ通じる海から山へのメイン道路、北野坂とトア・ロード。この二本の道路状況も落着き、道添いの有名ブランド店も店独特の雰囲気に戻った。このト

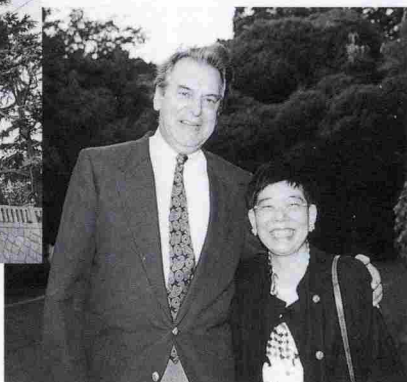
ア・ロードを山へ突き当たったところが神戸外国倶楽部。この歴史は古いが、地震には強かった。震災直後は避難所となり多くの住民がここで暮した。今、長い間避難所の役目をつとめた北野小学校も廃校となり、新たな神戸の空間へと衣替え中である。

このように、北野町山本通界限には新しい息吹きが感じられるまでになった。街は明るく、ときめいている。九七年秋、十六回目を迎えた神戸ジャズストリートには、海外から多くの楽団が参加し、楽しみに訪れた人たちも全国から集り大盛況であった。ジャズ発祥の地、神戸ならではの催しで、年々、ファンも増加。

こんななか、私の心の中にボツカリとあいた小さな穴。それは北野周辺のレンガ造りのレンガに思いをはせる。その多くが、どうしても元通りにはならなかった。外扉やシ



トアロードのつきあたりにある
大ヒマラヤ杉



神戸外国倶楽部会長マーティン・ウィルバー氏（左）
と筆者（右）

ンボルの異人館の屋根の上の煙突などに使われるレンガは、止むを得ない事情だろう、従来のレンガから人造へと変わってしまった。実に残念なことだ。

こんなときも、北野の溝に目を向けると、溝底に敷きつめられたレンガのほとんどが健在だ。これにほっとし、心はなごむ。神戸開港当時、コンクリートよりレンガの方が労賃が安かった。とその謂を年寄りの方から聞いた。

また、北野町にかつてあった異人館のハンター邸。館は他へ移されたが、この邸宅の外扉は今も残っている。その扉の随所に開けられた直径十五センチほどの丸い穴。ハンター邸の頭文字の「H」の花文字が、鉄製で錆びてはいるものの邸の風情を保ってくれている。それから小さな小さな神戸村時代からこの二つの神社。鎮火の神様とお稲荷さんも健在。

私の愛する一番好きな神戸の道、トア・ロード。この道を登り詰めたところの外国倶楽部の石扉に刻まれた「A e 1890」の建立年の刻印。そのそばの大ヒマラヤ杉。この二つが、百年以前の神戸の当時を語ってくれている。ああ、なつかしい。

わが方は今、震災後半月、九七年夏死んだ二匹の親子の柴犬の、それぞれの十六年間の生涯の悲しみつづくと、思い出おこしに、毎朝、北野界限の小さな心の旅を続けている。



ハンター邸の外扉のなごり、鉄製の「H」



旧居留地には、恋人たちがよく似合う

むろん、始めにミナトありき、ではあるが、そこに人が集まり、建物が建ち、さまざまな物が流れていく町なくしては、いくら立派な港も生きてはこない。そもそも旧居留地とは、日米修好通商条約（一八五八年）による兵庫開港と同時に、貿易

を行う外国人のため日本政府が貸与した居住・営業地域のことである。古い地図を見ると、イギリス領事館やオリエンタルホテル、グラバー商会や造船のハンター邸など、そうそうたる建物が並び立つ。「神戸は、東洋における居留地としてもつともよく設計されている」と絶賛されていたというが、うなずけるだけの町割りだ。だが神戸の人々には、「慶応三年十二月、神戸開港」という正史より、たった一つの具象物——日を反射してきらきら光る異人の手になる建物の方が、ずっとインパクトが強かったにちがいない。ガラス張り和洋折衷の、広大な運上所。この建物は、「ビードロの家」と名付けられ、しばらく住民が弁当持ち

ト・ラヴ』（新潮社・刊）である。デビュー以来ずっと神戸を舞台に描き続けてきた私だが、実は神戸の中でいちばん好きな風景がここ——ミナト神戸の町を築く礎となった、外国人専用居留地の跡なのだ。神戸はここから生まれてきた。

——こんな書き出しで始まるのは、私の最新刊『ラスト・ラヴ』（新潮社・刊）である。



頬に風を感じた



②旧居留地界隈を歩く

旧居留地へ

きらきら第二章の風ひかる

玉岡 かおる（作家）

で見物に押し寄せたほどだったという。

そう、神戸には、見たこともないものを素直に珍しがる感性、弁当持ちで見物に行こうというイベント好きが、その頃からの気質としていまも変わらず受け継がれているのだ。

「異国のもの」は珍しい。しかし、自分の目では見られぬという点で、「過去」はそれ以上に珍しく、永遠に新しい。

これら「異国の」「過去」を覗かせる旧居留地が、こうも私たちをひきつけてやまない理由も、おのずとわかるというものだ。

そんなふしぎな町を舞台に、いつか思いきり華やかな物語を書いてみたいと思っていた。これもデビュー以来の私のテーマである、女系の血による女の生きざまを盛り込ませ、そして究極のラブストーリーに仕上げたいと。想いは実り、四百枚の原稿にまとまった。



旧・商船三井ビル。港町の歴史を見つめてきた

だがその時、よもやのあの大地震災。町がひび割れ、ビル群が崩壊したこの時に、私が綴った恋愛小説にいかほども値打ちがあるとは思えなかった。苦心の原稿は、町を埋めた瓦礫同様、ただの紙屑になってしまった。

しかしそうではなかった。生まれ変わる町、立ち上がる人々。

町にも、そしてこの町を描いた私の小説にも、「第二章」はある。

文明というものの脆さを知ったはずの主人公が、恋人のいるヒマラヤへの誘いを蹴って、自分が生まれた神戸に残ることを選んだ時点で、この小説の主題は語り尽くせたと思う。

いま、商船三井ビルがシックに蘇り、重文の十五番館も、海岸ビルも、生まれ変わる棺音の中にある。どんな悲しみが眠ろうとも、やっぱりこの町には、きらきら光るビードロの家と、それを珍しがってくりだす人々とが、何よりいちはん似合っている。

八百枚に膨れた『ラスト・ラヴ』を世に送ってもう半年。私の頬にも、チェッカー旗を吹き上げていく風の勢いを感じた。



道を渡る。第2章に向かって



③トアロードを歩く

M e M e (金純) (パーソナリティー)

神戸の名物通り

「粹でいなせ」は健在

サンディエゴ時間午後三時四十二分。オフィスの電話が鳴った。アメリカ人のクライアントを前にして、私は普段と何ら変わりなく受話器を取った。その時、日本時間は午前七時四十二分。父の声がうわずついている。「こっちで地震があったんやけど、皆無事やから。生きとうから。心配するなよ」。私はてっきり、また父が私を日本へ呼び戻す為の作戦かなと思ひ、すかさず「もうー、地震ぐらいでガタガタ言つて。そりゃガタガタ揺れただろうけど、私はまだ日本には帰らへんよ」「とにかく皆大丈夫やから」「うん」ガチャ。神戸の地震なんてきつとなまらずも反応しない程度だろうにと、私は再び仕事に戻った。その日、サンディエゴは真冬だというのに穏やかな気候のもと、抜けるようなカリフォルニア特有の青空が広がっていた。父からの電話の一件は何の余韻も残さず私の脳裏から消えていた。



シュビドゥピカフェの店長・井上さんと。洋雑誌のバックナンバーはここでというお客さんも多い

サンディエゴ時間午後五時三十六分。仕事を終えて自宅に戻り、これまた普



愛しのトアロード。後方左手に見えるのがカフェ・リップル

段と何ら変わりなくニュースチャンネルにスイッチオン。あーどこかで大地震があったみたいやなあ……燃えているわ……エッ!とその瞬間、全身の血液が逆流するのを感じた。メディアは残酷だった。家族でよく行った加納町の三平寿司の看板が地面にへたつていた。天竺園とおぼしき建物が瓦礫となっている。それは、遠く離れた私の無力さを痛感させた。何も出来ない。ただ流れて来る映像に見入っては涙するだけだった。日本への電話はその時つながらなくなっていた。友人の安否が気になりつつも父と私をつないだあの一本の電話がこの上なく有り難かった。

その年の三月に帰国した。スーツケースの中身はミックスナッツやハーシーズのチョコレートで埋め尽くされていた。通関の際、重量オーバーであることを告げられ、

事情を説明すると、これも持って帰ってと機内食で出されるスナックを溢れんばかりに詰め込んだ大きな紙袋を手渡された。

二年振りの神戸。見るも無残な情景は私に相反する二つの思いを奮い起こさせた。それは、生まれ育った街がもう思い出の中だけでは存在しないのかという絶望感と、新しい神戸へと生まれ変わる無限の可能性を秘めた期待感であった。

北野と三宮を南北で結ぶいなせなストリート、トアロード。そのトアロードで母が長年営んできたブティックも震災後、文化祭の模擬店を思わせるような手作りのカフェにして一時ランチも出した。ところが、バックトゥベイシック。母の職人気質は変わらず、リニューアルして再びチャイナドレスオーダー専門店として新たな一歩を踏み出している。トアロードにとってなくてはならない老舗、デリカテッセンやマキシン、クロスなどのシ



カラーリングはいつもここ「アレックス・コロレ」で



オモシログッズいっぱい「ホンコンキング」。ここへ来たら遊んで帰るべし

ョップがこの小粋なストリートに絶大な安心感を与え続けてくれている。そして今、トアロードはさらに粋なストリートへと向かって走り始めた。それは、震災後のニューショップの出現。まだそここで解体作業が行われていたあの頃、真つ暗な夜のトアロードでいち早くライトを灯していたシュビドゥピカフェ。「トアロード」の標識さえ見なければ、まるでここはおフランス!?と思わせるオーブンテラスがシユールなカフェ、リップル。チーフ・柏木の矢沢節がクセになるアレックスの姉妹店、カラーリングはおまかせ下さい!のアレックスコロレ。そして、今をときめくトアウエストにあるハエトリ紙効果炸裂のアクの強い香港グッズショップ・ホンコンキング。その他にも胸にひつかかるいなせなニューショップが続々と登場した。

レトロモダンが漂うストリート、それが今のトアロード。昔ながらの粋を確実に残しつつ新たな息吹を感じる街。帰国後、神戸を目にして私の胸で交錯した二つの思い。絶望感は浄化され、良き思い出だけがしっかりと胸に刻み込まれている。そして片割れの方はというと、そりやもう、空気を入れすぎた風船のようにちぎれんばかりに膨らんでいる。永遠にはじけてつぶれてしまうことのない風船のように。



④夜の三宮を歩く

神戸 ほろ酔い歩き

福元 早夫 作家

「トムキャンティ」 中央区加納町幸田ビル一階

「人生の荒波の中でいかにベターに生きるか。当然のことですが、明るい勇気の湧く話題で活気をつくってるんです」と榎崎夫さんは笑顔でカウンターを挟んでむき合った。バブル経済の不景気の中で地震に直撃された。兄夫婦を亡くした。逃げだしたかった。神戸が好きだからできなかった。後ろを見ないようにしている。

「人間同士が寄りそう気持ちが大切です。やつとお客さんが定着しました。信頼関係があらたになったようです」と笑顔がよく似合う。言葉が生きていて説得力がある。

「人があつまる秘けつは人間味のあるおだやかな雰囲気です。言葉でなく元気な顔と姿ですよ。カラをやぶって神戸に他の地域の人を引っぱりこむことです。精神的に今を支えているのは若いころからの人との出会いですからね」

店は人なりと感じた。落ちついて酒を楽しむ気分になつてきた。



「人があつまる秘けつは、元気な顔と姿」と話す榎さん

「サウオイ」 中央区長狭通オカニシビル二階

「北野坂が発祥地で、まだ土道のことです。三坪の小さな店でした」

カウンターをはさんで小林省三さんが語ってくれた。「スキーで足を折って仕事ができなくなったのはそのころです」。それでも自分に鞭を打って勉強は怠らなかった。

「一九七〇年の万国博のカクテルコンテストで優勝しましたね。念願のアメリカ旅行がプレゼントでした」

災い転じて福となす術を心得ている。つねに自分に不満を抱き努力をかさねる。震災では大打撃を受けた。それでも立ちあがった。三宮への深い愛情が奮い起たせたのである。「ゼロ以下からの再スタートでしたが、神戸の男たち以外で酒を飲む習慣を取り戻して欲しい。グラスをつかんで語り合うひとときを」という。店のバーテンダーはいつ



小林さんの温厚な人柄にひかれてお客さんは集まる

た。

「とにかくすごい人物です。人生経験の確かな豊かさは年輪があつて教えられるす」

「酒肆大関」 中央区下山手通一—五 四

「神戸を楽しんでもらうには良い品を安くをモットーに思いついて価格破壊をやりましたよ。千円で飲み放題。全品二割引です。お客さんが完全に戻ってきました。集客性の大切さを痛感しましたね」

接客にあれこれ気をつかいながら安富肇一さんがテーブルを挟んで坐った。店内は満員で笑いやおしゃべりがはじけている。外国人の顔を何人か見えた。

「先の先まで考えてサービスしていく気構えが大切です。従業員からも反対されて、賭けというより冒険でしたが、連日にぎわって、座席のないこともあるんです。値段が手



連日にぎわいをみせる「酒肆大関」。“安く良い品”も定着してきた

ごろで安心でき、客層を若くして喜んでもらえる店にするのが夢でしたからね」

庶民の生活の雰囲気があるから外国人にうける。女性客が多い。生活のイニシアチブをとっているのは女性だから大切にしないと、と安富さんはいきつた。

「延歌」—演歌スタジオ— 中央区中山手通カトオカビル地下一階

店内はダンスホールのようにでカウンタがL字形にのびていた。「震災で神戸の人が一番求めたのはごろ寝のできる空間への欲望でしたからね」と神戸のター坊は言った。プロの歌手である。「昭和三十五年から三宮から福原までギターで流していましたからね。あのころ八十人位の仲間がいましたよ。お客の心情や歌のスタイルに合わせますから実感的に生きて誇りをもっていましたよ」

十九年間神戸で流して独立したのは昭和五十三年で、震災で店が全壊して途方にくれた。神戸には深い思いと情があり、捨てるわけにはいかなかった。「このビルのオーナーが神戸のター坊は神戸から離れたらあかん、神戸にとどまれと店を貸してくれたんです」

人の心の温もりに触れた。地方へ行くと神戸のター坊で大事にされたという。店で働く女性は「生まじめな人です」とひと言だった。



流し時代、一番もうけた“哀愁列車”を披露

話題のひろば

1

第21回井植文化賞表彰式 「都市には文化性が必要」と受賞の戸谷氏



↑井植理事長を中央に、喜びの受賞者の皆さん



十月四日、第二十一回井植文化賞（財団法人井植記念会主催）の表彰式が、垂水区にある井植記念館で行われた。

今回の受賞者は、作家の佐伯敏光氏（文化芸術部門）、神戸大学医学部教授・水野耕作氏（科学技術部門）、財団法人神戸新聞厚生事業団（社会福祉部門）、姫路市立美術館館長・戸谷松司氏（地域活動部門）、写真家の山本靖夫氏（報道出版部門）、神戸日豪協会副会長・古澤峯子さん（国際交流部門）。

井植貞雄理事長の挨拶の後、各部門毎、選考委員によって選考経過の報告が行われ、表彰に移った。

受賞者代表挨拶は、戸谷さん。姫路市長時代に姫路の文化向上に大いに貢献したとして表彰されたが、「都市は文化性をもっていないといけない」と、あいさつの中でも都市のもつ文化性の重要性を強調した。

表彰式の後には、祝宴となった。

井植文化賞は、三洋電機の創設者である故・井植歳男氏によって創設された井植記念会の中心事業であるが、これまでに一二六個人・団体が受賞、地道な活動を続ける人々を顕彰する賞として高い評価を得ている。

（佐井裕勝）

話題のひろば

2

ロドニー賞受賞の 米田定蔵カメラマン レスポワールで写真展



↑ 米田夫妻を囲んで



↑ 陳舜臣さんよりロドニー賞を



↑ 懐かしの神戸と米田夫妻

「このたび思いがけずも『ロドニー賞』を受けることになりました。神戸開港のとき、ドカンと祝砲をぶつ放したイギリス艦隊の旗艦『ロドニー号』にちなんだ『神戸っ子をびつくりさせた業績へ贈る市民賞』というのですが、驚いたのは私です。記念の写真展は、三十数年間、神戸のまちと港を撮り続けたなかから、大震災をはさんで、その向こう側にあった近代建築のたたずまいを取り出し、かつてのまちの空気を味わっていただけだと願っています。そしてそれが、復興まちづくりの何かの示唆になればうれしい限りです」。

月刊神戸っ子の創刊号からカメラマンとして共に三十六年、神戸のまち、港、人を写し続けた米田定蔵さん（六十三歳）が、神戸風月堂主催の文化賞ロドニー賞を受け、その式典が十一月四日午後四時より、個展会場の元町・レスポワールで行われた。

代表委員長の作家、陳舜臣さんは、「米田さんには三十六年前、江戸川乱歩賞を取った時に、カメラマンとして神戸っ子誌の取材で来てもらったのが最初の出会いです」と感無量の面持ちで、ロドニー賞の彫刻家・小林隆一郎さんが創った明るい御影石の丸い作品が手渡された。

会場は十月三十日から始まり、約三十点の作品を、毎日百人の神戸っ子が熱心に鑑賞した。〈小泉美喜子〉

阪神・淡路百名所づくり 公募アイデア表彰式



↑牧冬彦阪神・淡路産業復興推進機構会長を囲んで百名所づくりの表彰者と審査員たち

話題のひろば

3

■阪神淡路百名所づくり表彰式 全国から公募 復興へのアイデア

阪神・淡路地域の創造的復興と観光・集落産業の発展を目指す「阪神淡路百名所づくり」の一環として「名所」の選定を、広く全国からの一般公募を実施。あわせて本事業の周知を図り、被災地域や圏内をはじめ全国的な喚起をと企画したところ、アイデアの部門は一四三六件、人気投票部門八三二一件が寄せられた。

十月二十一日新神戸オリエンタルホテルにおいてアイデア部門の入賞者の表彰式が、最優秀賞は該当なく、四人の優秀賞（審査員特別賞）十五万円を、宝塚市・山中祥子さんの「タカラジエヌの小道」、高槻市の山本宣さんの「瀬五郷街道」、西村亮一さんの「トアロード・ストリート・ミュージアム」、東京都の上薮竜希さんの「からくり時計めるへん広場」らが受賞。また優秀賞五万円には、「レトロ神戸新開地」で神戸市の岡雄一さん、「長田区をコリアンタウン in 長田」神戸市の宮田寿子さん、「中国五千年食文化彩館」大阪市の植松昌子さん、「居留地まつり」神戸市の大西貴子さんが受賞。他審査員賞四万円が五人の受賞者に、牧冬彦阪神・淡路産業復興推進機構会長から渡された。皆さんのアイデアは行政と共に実現できるものが選ばれていますので具体化に努力します」と牧会長の力強い言葉だった。

〈小泉美喜子〉

話題のひろば

4

漫画家の 高橋孟さんを偲ぶ会 開かれる



↑神戸のター坊と音寺しのぶさんが明石海峡大橋の二重唱を歌う



↑「エープリルフールがお葬式とは出来すぎ…」と田辺聖子さん



↑高橋ファミリーと田辺聖子・川野純夫ご夫妻を囲んで

神戸の漫画家・高橋孟さんが急逝されて、半年あまり過ぎた十月十八日。孟さんのファンであり友人であった仲間達百人が集まって、「高橋孟を偲ぶ会」を開催した。会場は、孟さんもおなじみの生田神社会館。

発起人代表の田辺聖子さん、カモカのオッチャンはじめ、歌手の神戸のター坊や、作家の島京子さんなど、皆で孟さんの自画像の前で献花。献盃ののち、小山乃里子さんの司会で、しみじみと楽しく、やがて賑やかに面白く…というなごやかな会が続いていった。

「亡くなる数日前まで、自分が死ぬとは思わなかったのでは…」と話された孟さんそっくりのご子息、高橋芳国さんの言葉に、まだそこいらに孟さんが坐っているのでは…というムードがたただよう。

孟さんの名作『海軍めしたき物語』を出版した新潮社の伊東貴和子さん、画家の元永定正氏、書家の望月美佐さん、漫画家の木川かえる氏ほか、各界の名士達が、それぞれに孟さんが在りし日の話を語りついで、語り尽さないひとときであった。

こんなにも皆に愛されながら、「お先に！」と一人旅に出してしまった孟さん。あの世でのしあわせを祈って止まない。
〈小泉美喜子〉